

博士論文 2019年度

(要約)

同一性と個体

—種別概念に基づく体系的アプローチ—

横路 佳幸

# 目次

---

## 序論

- 0.1 本論文のテーマ
- 0.2 本論文の目標
- 0.3 いくつかの留意点
- 0.4 本論文の構成

## 第一章 予備的考察：種別概念をめぐる諸前提

- 1.1 三つの前提
- 1.2 種別概念小史：アリストテレス・ロック・ストローソン
- 1.3 種別概念の役割：同一性規準の提供
- 1.4 同一性規準のちょっとした敷衍
- 1.5 種別概念の分類：実体とその制限
- 1.6 種別概念の射程：裸の個体の不在
- 1.7 まとめ：諸前提のベクトル和

## 第二章 同一性関係の形而上学：相対主義から種別論的な絶対主義へ

- 2.1 同一性に対する根本的な疑問
- 2.2 同一性の「解明」
- 2.3 「解明」の系譜と玄関マット
- 2.4 ライプニッツの法則と同一性の反射性
- 2.5 同一性の相対主義：ロックとギーチ
- 2.6 数え上げとパラドクス：フレーゲとギーチ
- 2.7 フレーゲの分析
- 2.8 同一性の普遍的な種別論の拒否？：チザムとバーク
- 2.9 種別的多元論
- 2.10 存在論上のデフレ主義？
- 2.11 同一性の普遍的な種別論・再訪
- 2.12 種別的多元論の諸問題
- 2.13 同一性の種別論的な絶対主義と架橋原理
- 2.14 まとめ：同一性の相対主義から種別論的な絶対主義へ

## 第三章 同一性表現の意味論：バトラーの区別を擁護する

- 3.1 バトラーの区別

- 3.2 同一性表現の関係項
- 3.3 チザムの解釈
- 3.4 バクスターの解釈
- 3.5 ギーチ的な意味論上の相対主義
- 3.6 カプランの意味論から非指標的文脈主義へ
- 3.7 同一性表現の非指標的文脈主義
- 3.8 状況内のパラメーターと内包オペレーター
- 3.9 増殖戦略におけるパラメーターの措定根拠
- 3.10 同一性表現の非指標的文脈主義における理論的恩恵
- 3.11 ギーチの固有名論
- 3.12 固有名の指標主義
- 3.13 同一性言明の真理条件と顕性種別概念
- 3.14 まとめ：バトラーの区別を擁護する

#### **第四章 認知的な個別化の認識論：認識的な種別概念主義の一形式**

- 4.1 アリストテレス的なテーマの継承
- 4.2 認識的な種別概念主義の素描：ストローソン・ウィギンズ・ロウ
- 4.3 二種類の反論
- 4.4 どれであるかの知識
- 4.5 認知的な個別化についてのラッセルの原理
- 4.6 種別概念の把握と証拠主義
- 4.7 叙実主義的で証拠主義的な種別概念主義
- 4.8 第一の反論への応答：叙実的な証拠の重要性
- 4.9 第二の反論への応答：「個別化」の多義性
- 4.10 まとめ：認識的な種別概念主義の一形式

#### **結論**

##### **付論 A 「同一性」の二つの相：不可識別者同一の原理は妥当か**

- 第1節 論争の概観
- 第2節 「同一性」・個体化の原理・ロックの原理
- 第3節 問題の所在と解決
- 結語

##### **付論 B 概念主義的実在論に向かって：原初主義と種別論的な絶対主義**

- 第1節 同一性の原初主義

第2節 同一性の種別論的な絶対主義

第3節 概念主義的实在論による調停

結語

**付論 C 質料形相論的な構成主義：種別的多元論のさらなる展開**

第1節 種別的多元論と構成主義

第2節 質料形相論的な構成主義

第3節 「形相」の多様性

結語

**参考文献**

## 要約

---

### 【概要】

本論文は、同一性 (*identity*) をめぐる三つの問題を取り扱う。第一に、あらゆる事物が自身との間で、そして常に自身との間でのみ持つ同一性関係とは、形而上学的な観点から見るとどのようなもので、それはなぜ・いかにして成立するのか。第二に、言語を巧みに使いこなす者として我々が日常的な事物に対して使用する「同一である」という同一性表現や同一性言明とは、意味論的な観点から見るとどのようなもので、またそれはいかにして適切な指示対象や真理値を持つのか。第三に、知覚を行使する主体として我々が日常的な事物に対して行っている認知的な同定・個別化とは、心・知覚の哲学の観点から見るとどのようなもので、またそれはいかにして成功するのだろうか。

本論文の目的は、同一性関係、同一性言明、認知的な同定という三者の本質やあり方を統一的な視点から解明することで、それらが相互に絡み合う体系性を持つようないわば同一性の統一理論を構築することである。ここで言われる「統一的な視点」とは、猫や河川、人などのいわゆる種別概念 (*sortal concept*) との結び付きを指す。種別概念は、たとえば猫概念や河川概念、人概念、基数概念、分子概念などを具体例とし、ある個体について「それは何であるか」に適切な答えを与える概念のことである。また「統一理論」とは、同一性関係、同一性表現、認知的な個別化に関する形而上学、意味論、心・知覚の哲学上の多様な理論、および「同一性」と不可避に関連すると考えられる「個体」の形而上学・意味論上の理論を組み合わせた理論パッケージを指す。本論文では、そうした包括的なパッケージを種別的な親和性によるアプローチと呼び、各理論の相互関連性・依存性を論じる。

本論文は以下の構成を持つ。第一章では、種別概念に関する予備的考察を行う。第二章では、同一性関係と個体のあり様が種別概念によって形而上学的に「解明」されると示し、最終的に同一性の種別論的な絶対主義と種別的多元論を提示する。第三章では、同一性表現とその関係項の固有名の意味論的な振る舞いを種別概念によって明らかにし、その考察がいわゆるバトラーの区別に資するものであると示す。そのために、同一性表現の非指標的な文脈主義と固有名指標主義を提示する。第四章では、認知的な個別化が種別概念の把握を主体に要請することを心の哲学もしくは認識論の観点から論じ、主要な反論に応答可能な種別的な個別化の理論の一形式を構築する。そのために、叙実主義的で証拠主義的な種別概念主義を提示する。付論 A, B, C では、同一性の種別論的な絶対主義または種別的多元論を補強する形而上学的な議論を展開する。

### 【第一章 予備的考察：種別概念をめぐる諸前提】

第一章では、次章以降で展開される「同一性」の多角的な解明のための予備的考察を行う。とりわけ、そうした解明における基本的な道具立てである「種別概念」がどのようなもので

あるかについて、三つの前提を措定する。

第一の前提とは、「個々の種別概念は、それに特徴的な同一性規準を与える」という種別概念の役割に関するものである。この前提を措定するため、1.2節では、種別概念がこれまでどのようなものとみなされてきたかをアリストテレス、ジョン・ロック、P. F. ストローソンによる特徴付けに沿って歴史的に概観する。続く1.3, 1.4節では、種別概念に対するP. T. ギーチ、デイヴィッド・ウィギンズ、E. J. ロウによる現代的な特徴付けを確認することで、同一性規準が同一性のテストから区別されること、種別概念と同一性規準の間に強固な結び付きがあること、そして同一性規準が種別多様性を持つことなどを指摘する。これにより本論文では、ある種別概念に属する個体の同一性は、その概念に特徴的な特定の規準関係が問題の個体間に成立するおかげで成立すると前提される。

続いて、1.5節で措定される第二の前提とは、「種別概念に分類されるのは実体的なものと制限的なものの一である」という種別概念の分類に関わるものである。実体的な種別概念は、個体が存在する限りそれが常に・必然的に属するような概念で (e.g. 猫)、それと対応する種別名辞が適用される規準にはいかなる制限も課せられない。これに対し制限的な種別概念は、個体が一時的・偶然に属するような概念で (e.g. 子猫)、対応する種別名辞が適用される規準には時制上または様相上の制限が課せられる。本論文では、この二種類の中でも、自然物と人工物を外延とする概念 (e.g. 河川、彫像、動物) こそが「種別概念」であると前提し、それら以外を考慮すべき範疇から除外する。

最後に、1.6節で措定される第三の前提とは、「いかなる個体も何らかの種別概念に属する」という種別概念の射程に関するものである。W. V. O. クワインのよく知られたテーゼ「同一性なきところに存在者はありえない」と軌を一にするこの前提は、我々に身近で日常的なあらゆる個体は (すぐには判然としないとしても) 必ず何らかの種別概念に属するということを述べる。この際に言及される「種別概念」とは、問題の個体があらゆる時点・世界において常に属するような概念、すなわち実体的な種別概念に相当する。よって第三の前提は、実体的な種別概念に一切属さないという意味における「裸の個体」は決して存在しないということ述べるものとなる。

以上の種別概念の役割と分類、射程をめぐる一連の諸前提は、いわば議論の方向性を定める「ベクトル」に相当し、本論文全体が到達すべき最終地点である「ベクトル和」すなわち「同一性の統一理論」の内実はこの諸前提によって規定される。

## 【第二章 同一性関係の形而上学：相対主義から種別論的な絶対主義へ】

2.1節では、同一性関係の解明に対する根本的な疑問としてその原初性・定義不可能性を取り上げる。続く2.2節では、同一性が仮に原初的で定義不可能だとしても、それはウィギンズ的な解明に頼ることで分析可能であると主張する。ウィギンズ的な解明とは、多様な諸概念との結び付きにおいて、問題の概念の特徴を全体論的に明示化することである。2.3節では、ウィギンズ的な解明が、フレーゲの解明やストローソンの記述的形而上学と重要な点

で共通することを指摘し、本論文で採用する哲学的方法論を確定させる。

2.4 節では、同一性関係に認められる諸特徴として、反射性とライプニッツの法則を形式化する。2.5 節では、種別的同一性（同じ  $F$ ）を新たに導入し、ロックによる人概念とヒト概念の相違の議論に基づいてギーチが展開した同一性の相対主義を概観する。特に、同じ  $F$  であるような個体は必ずしも同じ  $G$  ではないという主張を「ロック的な相対主義」、そして同一性関係は常に種別概念に相対化されるという主張を「ギーチ的な相対主義」と名付ける。2.6 節では、ギーチ的な相対主義の起源がフレーゲによる数の種別概念への相対化の議論にあると指摘し、その魅力と説得性を簡潔にまとめる。

2.7 節では、ロック的な相対主義を論駁する議論として、種別化されたライプニッツ論証を提示する。特に絶対主義と相対主義の分水嶺は、フレーゲの分析という同一性と種別的同一性を取り結ぶ原理の正否にあると論じ、フレーゲの分析を棄却する河川論証を紹介する。2.8 節では、河川論証に対するありうる応答として、ロデリック・チザムやマイケル・バーク、マイケル・レイによる諸理論を検討し、それらがギーチ的な相対主義に認められる同一性の普遍的な種別論という利点を犠牲にすると論じる。2.9 節では、河川論証に対する本論文の主張として、異なる種別概念に属する個体を存在論的に区別する種別的多元論を擁護する。これにより、いかなる相対主義に陥らずとも同一性の普遍的な種別論は維持可能であると論じる。2.10, 2.11 節では、ロック的・ギーチ的な相対主義に付随する「個体」の存在論よりも種別的多元論の方が優位に立っていると示し、2.12 節では、種別的多元論に残された諸問題を紹介する（解決策は付論 C で提示する）。2.13 節では、種別的多元論と普遍的な種別論を絶対主義の観点から両立させる同一性の種別論的な絶対主義を展開し、種別化されたライプニッツ論証およびそこから引き出される架橋原理を擁護する。この原理によると、種別概念  $F$  に属する個体の同一性関係は、 $F$  によって相対化されないとしても、同じ  $F$  であることと必要十分もしくは基礎付けの関係にある。

以上から、原初的で定義不可能な同一性関係は、あらゆる種別概念に対し絶対的で、ライプニッツの法則を満たす単一の同値関係でありながら、その成立は種別的同一性の成立によって形而上学的に基礎付けられるものとして「解明」されると結論付ける。

### 【第三章 同一性表現の意味論：バトラーの区別を擁護する】

3.1 節では、ジョゼフ・バトラーによって導入された同一性表現の緩い意味（IL）と厳密な意味（IS）の区別を紹介する。3.2 節では、ラッセルの記述理論などに基づくことで、本論文における同一性表現の典型的な関係項は（ときに時点限定的な）固有名であると約定する。

3.3 節では、バトラーの区別に対するチザムの解釈を、3.4 節ではドナルド・バクスターの解釈を紹介し、両解釈に対し利点と欠点を指摘する。続く 3.5 節では、ギーチ的な意味論上の相対主義を、同一性表現の論理形式に種別概念  $F$  を組み込むような隠された変項説として再解釈したうえで、それを一部退けながらもバトラーの区別の適切な理解に資する部分

があると主張する。これにより、バトラーの区別に対し次の三つの特徴を持つ新解釈を展開する。第一に、同一性表現はいかなる場合でもライプニッツの法則を満たす単一の関係を示す。第二に、IL と IS の区別は、その時々で問題となる種別概念の違いに基づく。第三に、IS が帰属される偽なる言明と IL が帰属される真なる同一性言明は、厳密もしくは緩い同一性規準の存在によって両立する。

上記の新解釈を理解可能なものとする哲学的基盤として、本論文では、新たに同一性表現についての非指標的文脈主義を展開・擁護する。3.6 節では、デイヴィッド・カプランの意味論との関連の中で一般的な非指標的文脈主義を導入し、その枠組みが「意味内容の一定性（非指標性）と外延の文脈鋭敏性の両立」を目指すものであることを確認する。3.7 節では、非指標的文脈主義を同一性表現に応用し、値踏みの状況に種別概念パラメーターを措定する。具体的には、同一性表現の意味内容は常に、単一の同一性関係であるのに対し、その外延は当の文脈で問題となる種別概念または種別的同一性に依拠して変動すると主張する。3.8 節では、種別概念パラメーターを値踏みの状況に措定する理論的根拠を示すために、カプランのオペレーター論証などを概観する。3.9, 3.10 節では、ジョン・マクファーレンの示唆を応用することで、新たなパラメーターの措定根拠が理論的恩恵にあることを示し、同一性表現の場合「恩恵」とはバトラーの区別の新解釈を十全に説明可能であることに依拠すると論じる。3.11, 3.12 節では、同一性言明における固有名の意味論的振る舞いを考察し、ギーチの固有名論を一部修正することで、固有名の指標主義を展開・擁護する。これによると、一つの固有名は、文脈鋭敏的な意味特性を介することで、同時空領域にある二つの個体を文脈に依拠して指示する。3.13 節では、上記議論に基づくことで同一性言明の真理条件全体がどのようなものであるかを明らかにする。

以上から、同一性表現の意味（意味内容）がライプニッツの法則を満たす二項的な同一性関係となる一方で、その外延となる個体の順序対はその表現を用いる文脈で決定される値踏みの状況内の種別概念パラメーター  $F$  の値に依存すると結論付ける。

#### 【第四章 認知的な個別化の認識論：認識的な種別概念主義の一形式】

4.1, 4.2 節では、ストローソン、ウィギンズ、ロウにならって認識的な種別概念主義を導入する。この理論によると、ある個体  $o$  についての（特に視覚的な行使に基づく）認知的な個別化とは、 $o$  をまさに自身と同一のものとして剔出・再同定し、 $o$  をその他の個体から識別する活動を指し、その活動が成功するためには、認知主体は  $o$  の属する特定の種別概念については  $o$  が従う同一性規準を正しく把握せねばならないとされる。

4.3 節では、認識的な種別概念主義に対してこれまで提起されてきた主要な二つの反論を紹介する。第一の反論によれば、主体が問題の個体の属する種別概念を誤認する、もしくは無知である場合でも、その個体を主体が個別化することに失敗するとは限らないとされる。また第二の反論は、個別化のあり方の経験的な裏付けに関わる。FINST 理論や対象ファイル理論などの近年の認知心理学上の成果によれば、個体の視覚的追跡は種別概念の把握を



必要としない。よって、個別化を行う認知主体に対し種別概念の正しい把握を課す認識的な種別概念主義は、主体に不要でありにも強い認知的要求を課すか、もしくはいくつかの経験的な証拠と衝突しうるように見える。

上記二つの反論に応答するため、4.4, 4.5 節では、「認知的な個別化」がどのような認知活動であるかを詳細に検討する。その際、ウィギンズやロウの議論を援用し、さらにガレス・エヴァンズによって擁護されたラッセルの原理に一部修正を加えることで、「個別化」とは「問題の対象はどれであるかについての知識」、とりわけ特定の個体の同一性についての命題知の獲得を主体に要請する活動として規約されると主張する。4.6, 4.7 節では、そうした「個別化」がなぜ種別概念の正しい把握を主体に要請するのかを考察する。このとき、現代認識論上のある種の証拠主義を提示することで、同一性についての命題知の獲得には当の信念に正当化を与える認識的な証拠が求められ、その証拠に相当するのは、主体による種別概念についての知覚経験であると主張する。特に、特定の個体  $o$  についての単称的な同一性命題を知るためには、 $o$  の属する特定の種別概念についての真正の知覚経験、およびその種別的同一性についての正しい信念が規範的に要請されると主張する。4.8, 4.9 節では、個別化の成功における叙実的な証拠の重要性、そして「個別化」や「同定」などの用語の多義性の議論から、先の二種類の反論に応答できると論じる。また、認知心理学や哲学における「スペルキオブジェクト」や「顕性種別概念」が認識的な種別概念主義上でいかなる役割を担うかについても考察する。

以上から、認知的な個別化とは同一性の知識と関わる認識論的な活動であり、その成功は、その個体の属する種別概念についての真正の知覚経験とその種別的同一性についての正しい信念を叙実的な認識的証拠として持つことを主体に要請すると結論付ける。

### 【付論】

三つの付論では、第二章から第四章までの議論では詳しく論じることができなかった論点を補強するために、同一性・個体の形而上学をさらに発展させる。

付論 A 「「同一性」の二つの相：不可識別者同一の原理は妥当か」では、ライプニッツの法則の逆に相当する不可識別者同一の原理が妥当であるかを問う形而上学上の問題を取り扱う。この問題に対して本論文が提示する解決策とは、「同一性」には、個体の一意性を形而上学的に根拠付ける一項的な「自己同一性」と人間中心的な概念的な構造化の観点から実践的に理解される二項的な「同一性関係」の二つの相があるというものである。これにより、どちらの相が問題になるかに応じて、不可識別者同一の原理をどのように考えるべきかが変動すると主張し、さらに非反射的な空間的關係と種別概念によって個体の同一性を引き出す修正版ロックの原理に基づく戦略に立つことで、少なくとも「同一性関係」の相においては当の原理は妥当となると論じる。

付論 B 「概念主義的実在論に向かって：原初主義と種別論的な絶対主義」では、同一性の原初性を認める見解と同一性の種別的同一性への依存性を認める見解の間の緊張関係を解

消する。同一性の事実は、一見するとその他の事実によっては基礎付けられないほどに基礎的であるにもかかわらず、第二章の議論ではその事実は種別的同一性の事実に基礎付けられると考えられた。この問題を解決するため、「实在論」と「概念主義」を調停する案としてかつてウィギンズが示唆した議論を、付論 A で提示された「二つの相」に基づいて洗練することで、いわゆる概念主義的实在論を新たな仕方で提示する。これにより、概念主義的实在論が「同一性」の原初性と「同一性」の種別的同一性への依存性の間の両立可能性の理解に資することを示す。

付論 C「質料形相論的な構成主義：種別的多元論のさらなる展開」では、第二章で提示された種別的多元論をさらに強化し発展させる理論的基盤を構築する。種別的多元論を説明する理論として広く知られる構成主義を十全に解明するため、その核概念である「構成関係」をアリストテレス的な質料形相論の観点から捉え直す。これにより、種別的多元論で問題となる数的に異なる諸個体の構成関係は、「質料への形相的な規定による基礎付け関係」として理解可能であると論じる。その結果提示される質料形相論的な構成主義は、種別概念と形相のアリストテレス的な紐帯の維持を可能にするだけでなく、「形相」をどのように捉えるかに応じて、2.12 節で論じられた種別的多元論の諸問題を乗り越えることを可能にする理論でもあると主張する。